

哺乳類



絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ヤマネ

Glirulus japonicus

哺乳類概論

● 哺乳類分科会／伊澤雅子・佐々木浩・中西 希・馬場 稔・船越公威・渡部 登

■ 概要

レッドデータブック改訂（以下レッドデータブックは RDBとする）の検討にあたって、既存資料をもとに福岡県に現在生息している、あるいは過去に生息していたと考えられる8目19科37種を福岡県哺乳類目録として整理した。今回のRDB改訂に係る調査の結果、翼手目1種が新記録として確認されたため、それを加えて8目19科38種を現在の福岡県哺乳類目録とした。なお、福岡県RDB2011では8目19科44種が目録に挙げられていたが、今回は在来種に絞り、外来種7種〔イヌ（RDB2011のノイヌ）、イエネコ（RDB2011のノネコ）、シベリアイタチ（RDB2011のチョウセンイタチ）、アライグマ、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ〕は目録から除いた。筑前国続風土記（貝原編 1703, 1709）、筑前国産物帳（作者不明 1736、西日本新聞社 1975）などで過去に福岡県に生息していた記録のあるオオカミ、カワウソ、ニホンアシカ、ニホンカモシカは、絶滅種として目録に記載した。ニホンリスおよびツキノワグマについては、RDB2001において「過去における県内生息の確証が得られなかった」として対象外とされている。その後も、新規の情報は得られていないことから、今回も対象外とした。

福岡県哺乳類目録をもとに、今回のRDBで検討する種を抽出した。RDB2011の改訂の際に検討対象とした種はすべて今回も対象種とした。さらに、ニホンジネズミとヒミズは近年確認が少ないことから、今回は対象に加えた。また、今回新たに生息が確認されたモリアブラコウモリも対象種とした。基本的に対象地域は陸域としたが、前回同様、海棲哺乳類の中で、スナメリは沿岸部を主な生息環境としていることから検討対象に含めた。これらの対象種のほかに翼手目のクロホオヒゲコウモリ *Myotis pruinus*、シナオオアブラコウモリ *Hypsugo pulveratus* は福岡県内に生息の可能性があると調査対象としたが、今回の調査では生息は確認できなかった。以上により、ランクを検討した種は計27種となった。

なお、和名、学名、種の特徴については、原則として「The Wild Mammals of Japan 2nd ed.」（Ohdachi et al. 2005）と日本哺乳類学会による「世界哺乳類標準和名リスト2021年度版」（川田ほか 2021）に従った。翼手目については「識別図鑑日本のコウモリ」（コウモリの会編 2023）に従った。

今回の改訂作業に当たっては、以下の現地調査および情報収集を実施した。

- 1) コウモリ類を対象として、2021年6月～2023年11月に、主に自然度の高い英彦山、犬ヶ岳、釈迦岳およびカラ迫岳周辺域の森林、洞窟や隧道において計12回の本格的な調査を行った。調査方法として、カスミ網3～5地点とハーブトラップ2地点の設置による捕獲や捕虫網による手取り、バットディテクターと超音波無人機の併用による音声録音および写真撮影の記録を採用した。
- 2) ムササビを対象として、2021年11月～2023年10月に、英彦山地、三郡山地、釈迦岳山地にお

表 哺乳類-1 福岡県哺乳類目録

目名	科名	種 名	
真無盲腸目 (モグラ目)*	トガリネズミ科	カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephalus</i> (Temminck, 1842)
		ニホンジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i> (Temminck, 1842)
	モグラ科	ヒミズ	<i>Urotrichus talpoides</i> Temminck, 1841
		コウベモグラ	<i>Mogera wogura</i> (Temminck, 1842)
翼手目 (コウモリ目)	キクガシラコウモリ科	ニホンキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus nippon</i> Temminck, 1835
		コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i> Temminck, 1834
	ヒナコウモリ科	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i> Thomas, 1911
		アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i> (Temminck, 1840)
		モリアブラコウモリ	<i>Pipistrellus endoi</i> Imaizumi, 1959
		ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i> (Peters, 1880)
		モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i> (Temminck, 1840)
		ノレンコウモリ	<i>Myotis bombinus</i> Thomas, 1906
		テングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i> (Peters, 1880)
	コテングコウモリ	<i>Murina ussuriensis</i> Ognev, 1913	
	ユビナガコウモリ科	ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i> (Hodgson, 1835)
オヒキコウモリ科	オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i> (Blyth, 1862)	
霊長目 (サル目)	オナガザル科	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i> (Blyth, 1875)
齧歯目 (ネズミ目)	ヤマネ科	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i> (Schinz, 1845)
	キヌゲネズミ科	ハタネズミ	<i>Alexandromys montebelli</i> (Milne-Edwards, 1872)
		スミスネズミ	<i>Craseomys smithii</i> (Thomas, 1905)
	ネズミ科	カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas, 1771)
		アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i> (Temminck, 1844)
		ヒメネズミ	<i>Apodemus argenteus</i> (Temminck, 1844)
	リス科	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i> (Temminck, 1827)
ニホンモモンガ		<i>Pteromys momonga</i> Temminck, 1844	
兎目 (ウサギ目)	ウサギ科	ニホンノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck, 1844
食肉目 (ネコ目)	イヌ科	アカギツネ	<i>Vulpes vulpes</i> (Linnaeus, 1758)
		タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i> (Gray, 1834)
		オオカミ	<i>Canis lupus</i> Linnaeus, 1758
	イタチ科	ニホンイタチ	<i>Mustela itatsi</i> Temminck, 1844
		ニホンテン	<i>Martes melampus</i> (Wagner, 1840)
		ユーラシアカワウソ	<i>Lutra lutra</i> (Linnaeus, 1758)
		アナグマ	<i>Meles anakuma</i> Temminck, 1842
アシカ科	ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i> (Peter, 1866)	
偶蹄目 (ウシ目)	シカ科	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck, 1836
	イノシシ科	イノシシ	<i>Sus scrofa</i> Linnaeus, 1758
	ウシ科	ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i> (Temminck, 1836)
鯨目 (クジラ目)	ネズミイルカ科	スナメリ	<i>Neophocaena asiaorientalis</i> (Pilleri & Gühr, 1972)

* かつては食虫目 (モグラ目) に分類されていたが, 高次分類群の再検討により新たに真無盲腸目が提唱された。この目の適切なカタカナ名は存在しないため, ここでは便宜上従来のモグラ目と記述した。

いて直接観察と痕跡調査による生息調査を行った。調査回数は各々3日、1日、1日であった。

- 3) ニホンモモンガとヤマネを対象として、2021年12月～2023年10月に、英彦山地と脊振山地、釈迦岳山地において巣箱と自動撮影カメラを併用した生息調査を行った。使用した巣箱と自動撮影カメラは、英彦山地でのべ616台・日、脊振山地ではのべ602台・日、釈迦岳山地ではのべ267台・日であった。
- 4) カワネズミを対象として、2022年2月～2023年10月に、北九州市の黒川および紫川、添田町彦山川、糸島市加茂川、八女市矢部川の各上流部において痕跡調査と自動撮影カメラによる調査を行った。使用した自動撮影カメラは、黒川のべ40台・日、紫川のべ204台・日、彦山川のべ144台・日、加茂川のべ207台・日、矢部川のべ178台・日であった。
- 5) 福岡県環境部自然環境課により2021年11月5日～6日、2022年6月15日～17日に実施された宗像市沖ノ島の合同生物相調査に分科会から各2名が参加した。2021年の調査には分科会委員の佐々木と渡部が参加し、シャーマントラップ、自動撮影カメラを用いて小型哺乳類に関する調査を実施した。2022年の調査には分科会委員の渡部と調査協力者の衣笠が参加し、シャーマントラップ、自動撮影カメラ、バットディテクターを用いて小型哺乳類に関する調査を実施した。
- 6) 分科会委員に個人的に寄せられた情報、委員各自の2010年以前の調査結果も検討資料とした。
- 7) 国による福岡県の自然環境調査資料、福岡県や県内市町村による自然環境調査資料、既存資料の収集を行った。収集にあたって、事務局九州環境管理協会にご協力いただいた。

その結果、福岡県RDB2024では、哺乳類として絶滅4種、絶滅危惧IA類1種、絶滅危惧IB類1種、絶滅危惧II類10種、準絶滅危惧11種を選定した。各種の記述にあたって、絶滅種の分布は過去に記録のある地域を示した。

今回は前回情報不足であったノレンコウモリ、オヒキコウモリもランクを決定したことから、「情報不足」の種はなくなった。ランクアップした種はカワネズミ、ハタネズミ、スミスネズミであった。特にカワネズミは英彦山および脊振山付近から情報が得られているものの、今回の調査では確認することができず、分布の局在化が懸念される。ランクダウンした種はヤマネとカヤネズミであった。ランクダウンした2種のうち、ヤマネは生息状況が好転しているわけではなく、情報が増えた結果、より正確な判定ができたと考えられる。カヤネズミは、生息環境は非常に不安定であり、継続的な生息地が確保されているわけではないものの、県内の各地で確認できていることからランクダウンした。

特筆すべき成果として、英彦山周辺域で本県から初めてモリアブラコウモリが捕獲されたこと、みやま市の新幹線高架橋のスリットでオヒキコウモリの生息が確認されたことが挙げられる（いずれも絶滅危惧II類）。また、絶滅危惧IA類としたニホンモモンガについては、「彦山の動物」（黒子1958）の生息の記述以降情報がなかったが、今回の調査により英彦山で確認することができた。

沖ノ島で2回の調査を行ったが、確認されたのは外来種のクマネズミのみで、在来種（ジネズミ類、コウモリ類）は記録されなかった。沖ノ島では1955年に九州大学のチームによってオキノシマコジネズミ *Crocidura suaveolens okinoshimae* が捕獲され、亜種記載された（Kuroda and Uchida

1959) [後にオキノシマジネズミ *Crocidura dsinezumi okinoshimae* と変更 (今泉 1960)]。1962年の捕獲 (黒木ほか 1966) を最後に記録がない。標本は1個体だけ残っており、九州大学農学部に保管されている。しかし、亜種記載の重要な形質となっていた頭骨が消失しており、仮剥製が残っているのみである。

■ 選定基準

哺乳類については、定量的な把握を行うためには時間と労力をかけた野外調査が必要となり、短期の見直しのための調査で定量的指標を判断できる資料を得ることは難しい。また、分類群の特性から研究機関以外の観察者からの情報を得られにくい。それらの状況から、定量的な評価は困難であり、定性的な判断をせざるを得なかった。基本的にRDB2011の評価を基準に、それ以降の情報と新たな調査結果をもとに、委員全員で議論して総合的に評価した。その中で、特に、「情報不足」としていた種については今回、現在の情報に基づいてランクを決定した。10年間隔の見直しにあたって、その間にも継続した調査を実施できる体制、様々な方面からの情報を蓄積するシステムが必要である。

■ ハビタット

種によって異なる様々な環境を生息地としている。以下のような環境が考えられる。

1. 山地森林部

今回の検討で唯一最も高いランクの絶滅危惧IA類に位置づけたニホンモモンガのほか、ムササビ、ヤマネ、ニホンザル、ニホンイタチ、アカギツネ、コウモリ類など多くの哺乳類の生息地、繁殖地、採餌域となっている。特に、大径木にできる樹洞はさまざまな種の休息場、繁殖場として利用されている。

2. 溪流

今回絶滅危惧IB類としたカワネズミは哺乳類の中でも溪流環境に適応した生活様式を持つことが特徴である。また、林内の水系はコウモリ類の採餌場としても機能している。

3. 社寺林

森林環境が減少する中で、大径木のある古い森林が維持されている場所として社寺林が挙げられる。近年、開発によって社寺林の際まで人工的な環境になっている場合もあるが、社寺林は文化的な意味ばかりでなく、野生生物の生息地としても重要である。

4. 自然洞窟・隧道・廃坑

コウモリ類の重要なねぐら場所になっているが、その周辺域の森林も採餌場として重要である。

5. 草地・河川敷・里山・都市内緑地

低地部の川沿いはニホンイタチの本来の生息地である。また、アカギツネも森林と低地部の草地など様々な環境を利用する。カヤネズミ、ハタネズミなどにとって、平野部の草地や河川敷において、草原として維持されている環境は重要である。

■ 保全対策

1. **生息環境の維持**：多くの種の生息環境は山地の自然林が中心であると考えられる。樹洞がある大径木、林内湿地、山地溪流も重要な構成要素である。県内は人口も多く、大都市も発達

植物群落
植物等

していることから、現在の森林部が、減少、分断化しないように配慮することが必要である。自然河川や河川敷、草地は、開発や人間による利用、または人間が利用・管理しなくなったことにより消失しつつあり、それらの環境の維持も必要である。また、特殊な生活様式を持つコウモリ類の保全のためには、自然洞窟、廃坑やダム工事用の横坑などの人工洞穴および隧道もできる限り維持管理しておくことが望ましい。カワネズミの生息が新たに確認された地域もあり、溪流の保全およびその溪流を維持するための周囲の環境、生態系の保全が必要と考える。

- 哺乳類
2. **外来種の除去と侵入防止**：県内にも多くの外来生物が定着している。哺乳類ではイヌ、イエネコ、シベリアイタチ、アライグマ、ヌートリア、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミが挙げられる。これらを含む外来生物による在来哺乳類への直接の影響に関する具体的な報告は現在のところないが、イヌ、イエネコは小型哺乳類を捕食している可能性は高く、在来の食肉目との競争も考えられる。シベリアイタチは近縁のニホンイタチとの競争が考えられ、ニホンイタチの生息環境が山地森林部に限定されている。また、近年急増しているアライグマは、今回実施したカワネズミを対象とした河川での調査すべてにおいて確認されており、さまざまな種と餌や生息場所を巡る競争が懸念される。
- 鳥類
3. **交通事故の防止**：県内は山地部も含め、交通網が発達しており、夜間も交通量が多い場所もある。野生動物の交通事故件数の全県的な資料がないが、注意喚起が必要である。
- 爬虫類
4. **共存策の検討**：近年、ニホンジカやイノシシ、アナグマなどによる農作物被害、森林環境の攪乱、生活被害などが問題となっている。それに対して、ある程度の個体数のコントロールが必要な場合もあるが、人と動物の生活圏の分離、特に緩衝地帯を設定することで野生動物との直接的な軋轢を緩和することや、人為的な餌資源の排除など生活の中の工夫によって共存の方法を考えることが望ましい。
- 両生類
5. **普通種の保護**：RDB2011でも今回も対象としなかった種は、コウベモグラ、キクガシラコウモリ、アブラコウモリ、アカネズミ、ヒメネズミ、ニホンノウサギ、タヌキ、ニホンテン、アナグマ、ニホンジカ、イノシシであった。これらの種は県内に普通種として生息していると考えられる。しかし、それぞれの生息環境は変化しつつあり、外来種の影響なども増加していることから、今後の動態には注意する必要がある。その種の減少だけでなく、生態系全体のバランスが崩れる事になる。

魚類

昆虫類

■ **調査協力者名**

衣笠 淳（株式会社地域環境計画）、九州大学総合研究博物館、熊本野生生物研究会、渡邊啓文（西日本技術開発株式会社）

甲殻類等

クモ形類等

■ **写真提供者名**

上田恭一郎、大山憲男、北九州市立自然史・歴史博物館、衣笠 淳、佐々木浩、津田堅之介、中西 希、馬場 稔、船越公威、渡部 登

貝類

■ **参考文献**

福岡市美術館。2022。 瀬VS唐犬！勝負の行方は？国宝鳥獣戯画と愛らしい日本の美術， pp. 142-143。
今泉吉典。1960。 原色日本哺乳類図鑑。保育社。

- 貝原益軒編著, 1703. 筑前国続風土記. 卷之二十九 土産考上, 文献出版 (1977復刻), 東京.
- 貝原益軒編. 1709. 筑前国続風土記.
- 貝原益軒編. 伊東尾四郎校訂. 2001. 筑前国続風土記. 文献出版.
- 貝原益軒・益軒会. 1910. 益軒全集 筑前国続風土記29巻. 中村学園大学 貝原益軒アーカイブ.
<https://www.nakamura-u.ac.jp/institute/media/library/kaibara/archive05.html>
- 川田伸一郎・岩佐真宏・福井 大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽 創・姉崎智子・鈴木 聡・押田龍夫・横畑泰志. 2021. 世界哺乳類標準和名リスト2021年度版.
<https://www.mammalogy.jp/list/index.html>
- コウモリの会編. 2023. 識別図鑑日本のコウモリ. 文一総合出版.
- Kuroda, N. and Uchida, T. 1959. A new form of *Crocidura suaveolens* (Pallas) from Okinoshima, off Northern Kyushu, in the Sea of Japan. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 32: 43-46.
- 黒木 茂・林 宏・吉田博一. 1966. 沖の島生物総合調査報告VII. 沖の島の陸産脊椎動物. 生物福岡, (6): 45-52.
- 黒子 浩. 1958. 彦山の動物. 田川郷土研究会 (編). 英彦山, pp.665-722. 葦書房.
- 日本哺乳類学会 (編). 1997. レッドデータ 日本の哺乳類. 文一総合出版.
- 西日本新聞社. 1975. 筑前国産物帳 上中下合本.
- Ohdachi, S. D., Ishibashi, Y., Iwasa, M. A., Fukui, D., and Saitoh, T. eds. 2015. *The Wild Mammals of Japan* 2nd ed. SHOUKADOH, Kyoto.
- 佐々木浩. 2016. 日本のカワウソはなぜ絶滅したのか. 筑紫女学園大学人間文化研究所年報, 27:95-111.
- シーボルト. 1967. 江戸参府紀行. 平凡社.
- 渡邊邦夫・本田剛章・三戸幸久. 2023. 竹下完氏による1970年におけるニホンザル分布アンケート調査結果. 霊長類研究. J-STAGE DATA, DOI:<https://doi.org/10.2354/psj.39.013>または
https://www.jstage.jst.go.jp/article/psj/advpub/0/advpub_39.013/_article/-char/ja
(作者不明). 1736. 筑前国産物帳 下巻.

表 哺乳類-2 新旧カテゴリー対照表

	福岡県RDB2011のカテゴリー							再選定種数※	追加種数※	掲載種数※	
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足				
今回のカテゴリー	絶滅	オオカミ ユーラシアカワウソ ニホンアシカ ニホンカモシカ						4	0	4	
	野生絶滅							0	0	0	
	絶滅危惧IA類			ニホンモモンガ				1	0	1	
	絶滅危惧IB類					カワネズミ		1	0	1	
	絶滅危惧II類				ヤマネ	ヤマコウモリ ヒナコウモリ テングコウモリ コテングコウモリ	ハタネズミ スミスネズミ	ノレンコウモリ オヒキコウモリ	9	1	10
	準絶滅危惧					カヤネズミ	コキクガシラコウモリ モモジロコウモリ ユビナガコウモリ ニホンザル ムササビ アカギツネ ニホンイタチ スナメリ		9	2	11
	情報不足								0	0	0
(合計)							24	3	27		

上位のカテゴリーに移行
 下位のカテゴリーに移行
 カテゴリー変更なし

	福岡県RDB2011のカテゴリー							合計種数
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	
今回除外した種※								0

今回追加した種	
絶滅	
野生絶滅	
絶滅危惧IA類	
絶滅危惧IB類	
絶滅危惧II類	モリアブラコウモリ
準絶滅危惧	ニホンジネズミ ヒミズ
情報不足	

※ 再選定種数 …福岡県RDB2011の選定種のうち、今回（福岡県RDB2024）でも再び選定した種の数。
 追加種数 …福岡県RDB2011の選定種以外で、今回（福岡県RDB2024）において新たに選定した種の数。
 掲載種数 …福岡県RDB2024に選定した種の数。（「再選定種数」と「追加種数」の合計）
 今回除外した種…福岡県RDB2011の選定種のうち、再評価の結果、今回（福岡県RDB2024）は選定しなかった種。

オオカミ

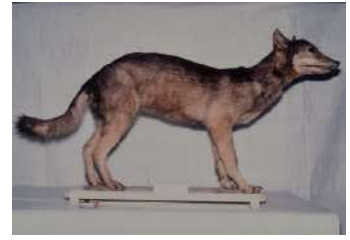
Canis lupus Linnaeus, 1758

絶滅(EX)

2011
絶滅環境省
絶滅

選定理由 本州以南に生息していた種はオオカミの亜種*C. l. hodophilax*とする立場と、独立種ニホンオオカミとする立場がある。一般には、1905年奈良県での捕獲が最後で絶滅したとされる。筑前国続風土記(1709)に「国内処々に多し」とされ、筑前国産物帳(1736)にも記載があり、1700年代には広く分布していたと考えられる。

分布情報 平尾台の「こむそう穴」と「人参窪第一洞」でニホンオオカミとされる頭蓋と下顎の一部が発見されているものの、時代ははっきりしない。県内の絶滅がいつの時代であったかは定かではない。



撮影：上田恭一郎

ユーラシアカワウソ

Lutra lutra (Linnaeus, 1758)

絶滅(EX)

2011
絶滅環境省
絶滅

選定理由 筑前国続風土記(1709)に「国内処々に多し」とされ、筑前国産物帳(1736)にも記載があり、1700年代には広く分布していた。明治時代以降、狩猟によって減少したと考えられ、県内では1924年の狩猟統計の37頭の記録が最後となる。全国的には、1979年に高知県で観察された後、確認されおらず、環境省は2012年に絶滅とした。

分布情報 1826年のシーボルトの江戸参府の際に田代から山家の間でカワウソが観察されている。福岡城の御館で1886年に捕獲されたカワウソのヒゲが福岡市博物館に所蔵されている。大正時代に星野村に生息していた。



撮影：佐々木浩

ニホンアシカ

Zalophus japonicus (Peter, 1866)

絶滅(EX)

2011
絶滅環境省
絶滅危惧IA類

選定理由 県内での生息情報は文献のみで、筑前国続風土記(1709)によれば「於呂島(現在の小呂島)と奥の島(現在の沖ノ島)などにあり、まれなり」とされているほか、宗像郡田野村と鐘崎浦との境(現在の宗像市)でも捕えられたとされている。1966年に福岡市東区の大岳西海岸にアシカ科の動物が漂着したとの記録があるが、同定確認されていない。

分布情報 福岡市西区(小呂島)、宗像市(海岸線、沖ノ島)



撮影：中西 希

ニホンカモシカ

Capricornis crispus (Temminck, 1836)

絶滅(EX)

2011
絶滅環境省
地域個体群

選定理由 県内に過去に生息していたという確実な証拠はないが、筑前国続風土記(1709)に「羚羊(にく)上座郡山中にまれにあり」と、また、筑前国産物帳(1736)には「かも志` `あを志` `なりまれにあり」と記載されている。「にく」はカモシカの別称であり、絶滅したものと考えられる。国指定特別天然記念物。日本固有種。

分布情報 筑前国続風土記に「上座郡山中」とあることから、朝倉市や東峰村の一部付近と思われるが、はっきりしない。



撮影：津田堅之介

ニホンモモンガ

Pteromys momonga Temminck, 1844

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類環境省
—

選定理由 彦山の動物(1958)に生息の記述があり、その後、情報がなかったが、2021年~2023年の巣箱と自動撮影を併用した調査によって英彦山地での生息が確認された。同様に実施した脊振山地での調査では確認できなかった。樹上性、夜行性で目につきにくく、生息の確認は困難であるが、熊本県・大分県・宮崎県の各県でも確認が相次いでおり、県内の他地域においても生息の可能性が残されている。これまで1地点のみの確認にとどまっていることから、絶滅危惧IA類とした。

危機要因 森林伐採、植生変化、その他(自然林の減少)

分布情報 添田町

種の概要 我が国には、体重150~220g程の本種の他、ユーラシア大陸に分布するタイリクモモンガ*P. volans*の亜種で体重62~123g程のエゾモモンガ*P. v. orii*が北海道に分布する。いずれも、同様に滑空するムササビ(体重約1kg前後)に比べてずっと小さい。

特記事項 日本哺乳類学会のカテゴリー(1997)では、保護すべき地域個体群(九州)とされている。日本固有種。



撮影：馬場 稔

カワネズミ

Chimarrogale platycephalus (Temminck, 1842)

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧II類環境省
地域個体群

選定理由 朝倉市や英彦山地、脊振山地、釈迦岳山地から確認されているが、確認地点は少ない。最近では2022年に添田町(英彦山地)と福岡市(脊振山地)で生息が確認されている。九州では主に脊梁山地に生息するが、九州北部地域からの情報は特に少ない。日本の哺乳類の中では、渓流域の水中という特殊な生息環境に適応した唯一の種で、環境変化の影響を受けやすい。分布の局在が顕著であることから、絶滅危惧II類から絶滅危惧IB類へのランクアップとした。

危機要因 河川開発、産地局限

分布情報 福岡市早良区、東峰村、添田町

種の概要 中型のネズミくらいの大きさで、前後肢の両側の剛毛が水かきの働きをする。主に森林内の山地渓流で、餌となる水生昆虫や小魚の豊富な環境に生息する。遊泳が巧みで、毛に空気を溜め、水中では銀色に輝いて見える。春から夏にかけて出産するが、詳しい生態は不明である。良好な環境が維持された山地渓流の指標種でもある。

特記事項 日本哺乳類学会のカテゴリー(1997)で、保護すべき地域個体群(九州)とされている。日本固有種。



撮影：船越威威

ヤマコウモリ

Nyctalus aviator Thomas, 1911

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 かつて、英彦山と福岡市中央区大濠公園での捕獲記録があったが、その後、県内で本種のねぐら場所は確認されていない。音声録音から、英彦山周辺域で生息が確認されているにすぎない。

危機要因 森林伐採、土地造成、その他(風力発電事故:バットストライク)

分布情報 添田町

種の概要 前腕長57~65mm、体重26~60gで大型。メスは生まれた年の秋に性成熟する。主食は飛翔昆虫(主にコウチュウ目やチョウ目)であるが、春先には小鳥(スズメ目)も捕食する。主に大木の樹洞をねぐらにするが、小鳥用の巣箱や人家もまれに利用し、近年は鉄道高架橋のスリットも利用している。

特記事項 環境省の指定では、2007年に準絶滅危惧であったが、2014年に絶滅危惧Ⅱ類に引き上げられた。



撮影: 船越公威

モリアブラコウモリ

Pipistrellus endoi Imaizumi, 1959

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
—環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 添田町薬師峠で、2023年6月11日にモリアブラコウモリが初めて捕獲され、周辺域で本種の音声が多録音された。この地域以外では本種の音声は録音されておらず、極めて限られた地域の森林に生息していると考えられる。

危機要因 森林伐採、土地造成

分布情報 添田町

種の概要 前腕長37~49mm、体重5~9gで小型。外見は近縁のアブラコウモリに似る。ねぐらは大径木の樹洞や樹皮下で、比較的自然度の高い森林に生息している。標高1,000m以上の森林で捕獲されることが多い。繁殖生態については不明な点が多い。

特記事項 本種は、最近九州(熊本県)で生息が確認され、福岡県で2県目となる。



撮影: 船越公威

ヒナコウモリ

Vespertilio sinensis (Peters, 1880)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
—

選定理由 福岡市西区沖合の大机島(無人島)は出産哺育集団(1,500頭前後)が毎年形成される唯一の繁殖地である。音声録音から、本種は数地点の森林を採餌空間として利用しているにすぎない。

危機要因 森林伐採、土地造成、その他(風力発電事故:バットストライク)

分布情報 福岡市西区、八女市、宗像市、太宰府市、添田町、築上町

種の概要 前腕長43~53mm、体重14~30gで中型。メスは生まれた年の秋に性成熟する。出産期は6月下旬から7月上旬で、通常1産2子。主食は飛翔昆虫(主にコウチュウ目やチョウ目)である。自然のねぐらは、島嶼の岩場の割れ目の隙間であるが、隧道や構造物の隙間も利用しており、近年は鉄道高架橋のスリットも利用している。

特記事項 本種は飛翔能力が高く、季節的な長距離移動がみられる。



撮影: 船越公威

翼手目(コウモリ目)ヒナコウモリ科

ノレンコウモリ

Myotis bombinus Thomas, 1906

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
情報不足環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 九州本土では、限られた森林に点在して生息しているに過ぎない。本種のねぐらは洞窟や隧道に限られ、県内では繁殖集団が見つからず、個体数は極めて少ないと考えられる。

危機要因 森林伐採，土地造成，その他（人工洞窟の老朽化による崩壊）

分布情報 八女市，添田町

種の概要 前腕長38～42mm，体重5～10gで小型。メスは生まれた年の秋に性成熟する。夏季に母系の出産哺育集団（10～200頭）を形成し，1産1子を出産する。主に林内や林縁を飛行し，小型の飛行昆虫や造網性のクモ類を摂食する。

特記事項 環境省の指定では，1998年に絶滅危惧IB類であったが，2014年に絶滅危惧Ⅱ類に引き下げられた。



撮影：船越公威

翼手目(コウモリ目)ヒナコウモリ科

テングコウモリ

Murina hilgendorfi (Peters, 1880)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
—

選定理由 九州本土では，各県の限られた数ヶ所の森林で見ついている。本種は自然度の高い森林に生息しており，県内では繁殖集団が見つからない。個体数は極めて少ないと考えられる。

危機要因 森林伐採，土地造成，その他（人工洞窟の老朽化による崩壊）

分布情報 北九州市小倉南区，朝倉市，添田町

種の概要 前腕長39～47mm，体重8～19gで中型。鼻孔は管状で左右に突出している。耳介は卵円形。ねぐらは群葉，枯葉，自然洞窟，人工洞穴（廃坑や隧道）で，頻繁にねぐらを変える。地表近くを飛行し，地上の昆虫も摂食する。

特記事項 モモジロコウモリやキクガシラコウモリと混群を形成することがある。



撮影：船越公威

翼手目(コウモリ目)ヒナコウモリ科

コテングコウモリ

Murina ussuriensis Ognev, 1913

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
—

選定理由 本種は自然度の高い森林に生息している。九州本土では，中・南部に分布域が広がっているが，北部ではほとんど分布していない。県内では繁殖集団は見つかっておらず，個体数は極めて少ないと考えられる。

危機要因 森林伐採，土地造成

分布情報 添田町，築上町

種の概要 前腕長28～36mm，体重4～8gで小型。鼻孔は管状で左右に突出している。耳介は卵円形。ねぐらは群葉，枯葉，自然洞窟，人工洞穴（廃坑や隧道）で，頻繁にねぐらを変える。森林中層で出産哺育集団を形成し，6月初旬に出産（1～2子）する。哺育終了後から春季にかけて単独生活に入る。

特記事項 環境省の指定では，これまで準絶滅危惧種であったが，最近，希少種から除外された。



撮影：船越公威

オヒキコウモリ

Tadarida insignis (Blyth, 1862)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
情報不足環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 九州地方に点在して分布しているが、個体数は少ない。県内ではこれまで沖ノ島沖での本種の採集と福岡市街での拾得記録、みやま市の新幹線高架橋での確認、英彦山周辺域や福岡市西区での音声記録があるのみで、分布域は限られている。

危機要因 森林伐採, 土地造成, その他(風力発電事故:バットストライク)

分布情報 福岡市西区, 八女市, みやま市, 添田町

種の概要 前腕長57~67mm, 体重30~45gで大型。尾膜から尾が1/3以上突出している。頭部は扁平で耳介は大きく楕円形で前方へ張り出している。海岸や無人島の断崖急斜面の乾燥した狭い割れ目や鉄筋コンクリートの校舎の継ぎ目の隙間または鉄道高架橋継ぎ目のスリット内をねぐらとして利用する。

特記事項 鉄道高架橋のスリット内では、本種とアブラコウモリが混棲している場合もある。



撮影: 衣笠 淳

ヤマネ

Glirulus japonicus (Schinz, 1845)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧IB類環境省
一

選定理由 英彦山で1971年に確認されて以来、長らく県内からの情報はなかったが、2001年末から2002年春にかけて、築上町(旧築城町)で連続して3頭が発見された。その後も情報が散見され、近隣諸県での確認状況からも断続的に分布している可能性があるため、絶滅危惧Ⅱ類へのランクダウンとした。2021年~2023年に実施した英彦山地、脊振山地、釈迦岳山地における生息調査では英彦山地と釈迦岳山地で生息が確認された。

危機要因 森林伐採, 植生変化, その他(自然林の減少)

分布情報 八女市, 豊前市, 嘉麻市, 朝倉市, 添田町, 築上町

種の概要 1属1種の日本固有種。体重約20gと小型で、樹上性・夜行性であることから目に触れる機会はほとんどない。背の中央に黒褐色の線があり、尾には長い毛を生じる。冬眠という寒冷な環境に適応した習性をもつにもかかわらず北海道には分布せず、分類学上の貴重性と生物地理学上の重要性をもつ。

特記事項 国指定天然記念物。日本固有種。



撮影: 北九州市立自然史・歴史博物館

ハタネズミ

Alexandromys montebelli (Milne-Edwards, 1872)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 農地の管理形態に変化があり、農耕地の周りの放棄された水田や原野が急激に減少した。多くの河川敷には客土が施され、イネ科植物も減少していると思われる。ハタネズミが生息できる環境は消失・激減したことが懸念される。

危機要因 河川開発, 植生変化, その他(草地の減少)

分布情報 北九州市八幡西区, 福岡市西区, 久留米市, 直方市, 中間市, 太宰府市, 嘉麻市, 吉富町

種の概要 背面は灰色でずんぐりしている。耳介と尾は小さく農耕地近くの草地に穴を掘ってすむ。最近ではあぜ道の改良によりほとんど見られなくなった。頭胴長95~136mm, 尾長29~50mm。歯は無根歯で終生伸び続ける。水中でも泳ぐことができる。

特記事項 日本固有種。

齧歯目(ネズミ目)キヌゲネズミ科

スミスネズミ

Craseomys smithii (Thomas, 1905)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2011
準絶滅危惧環境省
—

選定理由 福岡市内の山林は開発が進み、自然林との推移帯が極端に減少していることから生息環境の減少が懸念される。生体ばかりでなく斃死体も確認されていない。

危機要因 森林伐採

分布情報 太宰府市、みやま市、篠栗町

種の概要 ハタネズミより小型だが、尾は長く、尾長30~50mm、尾率は35~60%に及ぶ。山林に接する草地に住む。

特記事項 日本固有種。

真無盲腸目(モグラ目)トガリネズミ科

ニホンジネズミ

Crocidura dsinezumi (Temminck, 1842)

準絶滅危惧(NT)

2011
—環境省
—

選定理由 近年の環境調査では捕獲事例がないが、この数年間の調査で落とし穴による落下個体はしばしば確認されている。筑紫野市柚須原地区で延べ2個体を確認している。2010年以前の環境調査では福津市許斐山内の落とし穴に落下した個体を確認したが、それ以外の地域では情報がない。沖ノ島で記載された亜種とされているオキノシマジネズミについては2回の沖ノ島での調査でシャーマントラップを設置調査したが生息は確認できていない。

分布情報 福岡市東区、福岡市西区(玄界島)、筑紫野市、朝倉市、みやま市、那珂川市、みやこ町



撮影：渡部 登

真無盲腸目(モグラ目)モグラ科

ヒミズ

Urotrichus talpoides Temminck, 1841

準絶滅危惧(NT)

2011
—環境省
—

選定理由 2004年、福津市本木山周辺ではじき毘で捕らえられたのを最後に捕獲例はない。2010年頃宗像市林道で斃死体が採集されている。その他、近年の情報がない。

分布情報 福岡市早良区、大牟田市、筑紫野市、宗像市、朝倉市、那珂川市、添田町



撮影：渡部 登

コキクガシラコウモリ

Rhinolophus cornutus Temminck, 1834

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 環境省のレッドリストには記載されていないが、県内にはねぐらとなる洞窟などが少なく、個体数も少ない。かつて、生息していた糸島市の井原山周辺の廃坑が落盤で消滅した。

分布情報 北九州市小倉南区, 朝倉市, 糸島市, 香春町



撮影：衣笠 淳

モモジロコウモリ

Myotis macrodactylus (Temminck, 1840)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 環境省のレッドリストには記載されていないが、県内にはねぐらとなる洞窟などが少なく、個体数も少ない。かつて、生息していた糸島市の井原山周辺の廃坑が落盤で消滅した。

分布情報 福岡市西区, 八女市, 豊前市, 朝倉市, 糸島市, 香春町, 添田町



撮影：衣笠 淳

ユビナガコウモリ

Miniopterus fuliginosus (Hodgson, 1835)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 環境省のレッドリストには記載されていない。しかし、本種のねぐら場所となっている比較的長く大きい洞窟や海蝕洞は限られており、県内では非常に少ない。かつて、生息していた糸島市の井原山周辺の廃坑が落盤で消滅した。また、北九州市小倉南区の目白鍾乳洞でも人為的な影響で生息が確認されなくなった。

分布情報 福岡市早良区, 八女市, 糸島市, 香春町, 添田町, 築上町



撮影：衣笠 淳

ニホンザル

Macaca fuscata (Blyth, 1875)

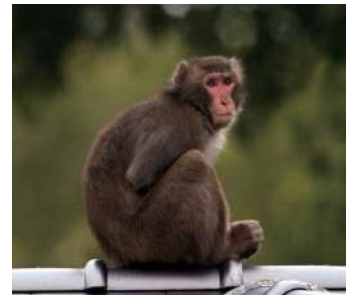
準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省
一

選定理由 群れから離れた個体は県内に広く分布するが、群れは香春岳周辺、脊振山地および福岡市西部から糸島市のみに限られる。2008年の福岡県自然環境課野生生物係(香春町と福岡県)の資料によれば、香春岳周辺では2群160頭が確認され、近年増加傾向にある。脊振山地の詳細は不明だが、約200頭と推定され、県内での個体数は少ない。群れの分布と数が限定されていることから準絶滅危惧とした。日本固有種。

分布情報 2008年の調査では、当時の県内66市町村(現在、60市町村)中、12市町村では確認されていない、とされていた。インターネットでの検索によれば、近年、これら未確認市町村のほとんどでもニホンザルの目撃情報が寄せられている。県内ほぼ全域に分布していると考えられるものの、詳細な分布調査、個体数調査は実施されておらず、正確な状況は不明である。



撮影：津田堅之介

カヤネズミ

Micromys minutus (Pallas, 1771)

準絶滅危惧(NT)

2011
絶滅危惧II類

環境省
一

選定理由 ダムの流れ込みや河川の氾濫原の草本類の穂約1mほどの高さのところ球巣を作り、保育、休息して生息していたが、2019年頃から生息環境である河川中流域にも球巣が見られなくなっている。福津市のピオトープには継続的にカヤネズミの球巣は確認されている。危惧の状況は10年前とあまり変わらないが、生息域は極端に減少している。

分布情報 北九州市若松区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市西区、福岡市早良区、久留米市、直方市、飯塚市、柳川市、八女市、筑後市、中間市、筑紫野市、大野城市、太宰府市、福津市、うきは市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、那珂川市、篠栗町、遠賀町、添田町、吉富町、上毛町



撮影：大山憲男

ムササビ

Petaurista leucogenys (Temminck, 1827)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省
一

選定理由 県内では英彦山地、古処山地、三郡山地および筑後川以南の山地で確認されている。主に山麓の社寺林などで確認されることが多く、樹洞を利用するため、大径木のある広葉樹林に好んで生息する。このような環境の減少や分断化が進み、個体群の孤立化を招いているところもある。日本固有種。

分布情報 大牟田市、久留米市、田川市、八女市、豊前市、筑紫野市、太宰府市、朝倉市、みやま市、添田町、みやこ町



撮影：衣笠 淳

アカギツネ

Vulpes vulpes (Linnaeus, 1758)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 県内の平野から丘陵帯，山地にかけて広く分布する。生息数についての調査は行われていないが，生息情報は減少傾向にある。げっ歯類や小鳥類などを主な餌とするため，もともと生息密度が低かったことに加え，宅地開発などによって丘陵地や山麓部の好適な生息地が減少している。

分布情報 2000年以降の情報：北九州市門司区，北九州市小倉北区，北九州市八幡西区，福岡市東区（立花山），福岡市西区（西浦），福岡市早良区（脊振山，板屋），直方市，大野城市，太宰府市（四王寺山），うきは市，嘉麻市，朝倉市，那珂川市（五ヶ山），篠栗町，水巻町，桂川町，みやこ町，吉富町，上毛町



撮影：佐々木浩

ニホンイタチ

Mustela itatsi Temminck, 1844

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 平野部では，ニホンイタチは開発などによって姿を消し，代わって外来種であるシベリアイタチが広く分布している。山地ではニホンイタチは河川沿いに分布しているが，集落や耕作地周辺ではシベリアイタチが入り込んでいる。脊振山地の河川沿いには広く分布しており，他の山地でも人間活動の影響が少ない河川沿いを中心に分布していると考えられる。日本固有種。

分布情報 福岡市，大野城市，那珂川市，みやこ町



撮影：佐々木浩

スナメリ

Neophocaena asiaeorientalis (Pilleri & Gahr, 1972)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 目撃情報などから減少していると考えられる。瀬戸内海環境保全協会は瀬戸内海の個体群について以下の5つの理由から減少してきているとしている。① 混獲水死説，② 埋立て・海砂利採取説，③ 化学物質説，④ 船舶事故説，⑤ 異物誤飲説。福岡県周辺海域における減少理由は特定できない。

分布情報 響灘，周防灘